

〈はじめに〉

『名詞・動詞150絵カード』という絵カード集があります。言語学習の基礎となる語彙教材として、ことばのテーブルの教材シリーズの最初に制作したものです。この絵カードが完成に至るまでには、カードの大きさや素材などを始めとして、さまざまな経緯があり、それなりの労力を必要とするものでしたが、その中で、もっとも苦労したのは、「動詞」に関わる諸問題でした。まず、50語という枠に、どの語(動詞)を採り上げるかという問題。そして、その動詞をどのような「絵」にするか、という問題でした。語彙は、当然のことながら、日常生活の基本語から選ぶわけですが、その基本語の中で多くの語が“落選”となりました。「出す」「歩く」「怒る」「持つ」などの動詞です。落選の理由は、それらの語が、絵として表現しにくかったからです。たとえば「出す」という単語は、それを絵にすると、“出している”ところなのか、それとも反対に“入れている”ところなのか判然としません。また「持つ」という単語は、基本語中の基本語ですが、何かを手を持つ“瞬間”は絵にできず、かといって、何かを持っている“状態”を描いても、その絵から、「持つ」という行為を主題として感じさせることは困難です。ことばの療育のスタートに用いる教材です。方向を示す→記号や、マンガ的な記号表現などは、出来る限り使いたくありませんでした。そのため、結果的に涙をのんでもらう単語が数多く出てしまったのですが、それでも外せなかった、「着る」「履く」「もらう・あげる」「開ける」などの動詞は、表現に工夫を凝らしたものの、解りやすさにおいて、どうしても限界のあるものになってしまいました。今回の学習会のテーマを「動詞」としたときに、まず浮かんだのが、この動詞絵カードの問題でした。そして、絵カードに収録できなかった動詞の顔ぶれを思い出しているうちに、動詞を絵で表しにくいことと、子どもが動詞を学ぶことの難しさは、同じ理由であることに気がつきました。◆言語発達の初期段階においては、動詞の習得は名詞に比べて遅れると言われています。それは、動詞の指し示す概念を推測することの難しさに起因しています。動作は、時間と共に変化し、消えて行きます。たとえばボールが転がった状況に対して、「転がる」という動詞を耳にします。でも、それがボールの動きの中のどの時間の、そしてどんな動きを示しているのかを推測することは容易ではありません。「転がる」も絵カードにしにくい動詞です。静止した1場面の絵の解りにくさ、それはそのまま、子どもにとっての動詞の解りにくさに重なります。◆では、動詞を絵で学ぶことは、難しく、また不自然で、意義のないことなのでしょうか。ことばの発達に問題のない子どもであれば、確かに意義のない、というより本来不必要なものでしょう。でも自然習得が困難な発達障害の子どもの場合、絵カードの学習には、さまざまな意義があります。絵による主題の明確化や注意の焦点化、という意義があります。また今回のテーマの動詞であれば、描かれた動作主の中に、自分や身近な人をイメージし、それらの人の動作の“意図”に気づく、という意義があります。言語習得に人工的な学習が必要とされる場合、それを、何気なく道なりに、進めて行くことはできません。子どもに、何かをはっと気づかせて、それを知識化して行かせることが、どうしても必要です。それを実現するためのものを、課題や教材、そしてコミュニケーションの中に仕掛けて行くことが、発達障害の子どもの療育だと思います。そして、その仕掛けの先陣を切るのが、絵カードなのではないでしょうか。

今回は、絵カードから始まって、さらに動詞を拓げて行く仕掛けについても考えて行きたいと思います。